スラゴンの風につつまれて

平賀 節朗

２月、南国での昼下がり、スラゴンホームステイの２階のテラスで濃い目のウヰスキーを片手に甘やかな緑色の風につつまれてゆっくりと紫煙をくゆらす。放心と陶然、やがてまどろみが訪れて・・・

スラゴンホームステイ

スラゴンホームステイ、なにかシャレた響を感じるかもしれないがここはボルネオの高原の田舎町、ラナウから３キロほどの離れた田園地帯の中にある民宿のような所である。

まあー。60 年前の日本の農村を連想した方がいいかもしれない。汲み取りの時代である。

スラゴンホームステイは水洗ではあるがイメージはそのへんの時代を連想していただいたほうが・・・。

ラナウはマレーシア国サバ州の州都コタキナバルより２時間半ほど山に分け入ったところである。

ボルネオ島、日本でこの島に詳しい人は少ないのではないか。「サンダカンのカラユキさん」、終戦直前の「サンダカン死の行軍」などを断片的に思い浮かべるのが精々でしょう。

北三分の一ほどがマレーシア、その中の一部分に豊かな国ブルネイがあり、南三分の二ほどはインドネシアである。詳しくは地図をご自分でどうぞ。

このスラゴンホームステイに１月の中頃から日本人がやってくる。避寒とゴルフ、豊かな自然

を求めて。短い人で一週間、平均一か月といったところである。平均年齢 70 歳。シニアのロングステイである。

勿論、外国人も来るが 1 月、2 月は日本人が多くなる。近くにゴルフ場があるのと長閑な田園地帯が広がるだけで他には何もない。腕前はさることながら相当のゴルフ好きでないと退屈してしまうだろう。

なぜここに来るようになったか？。私の場合、リタイアーを考えていた頃本屋の店先で「1000 円でゴルフが出来る」の本に目が留まりその後調べだしたのがきっかけである。実際、1000 円で出来るのである。

６年前に初めて夫婦で訪ね今回で３回目である。

ゲスト（ホームステイ故、滞在者をこう呼ぶ）も様々で、夫婦連れ、ゴルフ好きの単身男性、癒しを求めてかの単身女性。ロングステイ故、当然若者、子供はいない。外国のゲストは短期滞在で子連れも見かけるが。

ここではゲスト同士の不文律のようなものがありお互いの元会社、役職、出身大学等相手を手っ取り早く値踏みするような会話はしないようにしている。あくまでスラゴンで出会ってスラゴンで別れるラナウの仲間である。

帰国後も日本でも交流している話は多くないようである。この感じが私にはとても心地いい。

日本でのしがらみは成田のロッカーに預けて来、そして帰国時にロッカーから再びそれを背負って入国するのである。

ゲストは三食一緒であるしゴルフも一緒に出掛ける。自然と親しくなるしその人の人間性も分

ってくる気がする。

スラゴンホームステイはオスマン博士、ルンキャン博士夫婦の別荘で一部宿泊用に増築したものである。お二人共教育学の博士号をお持ちでサバ州では大変な有名人である。オスマンさんは部族の長の直系でとても一代ではできない品位あるお顔の温和な紳士である。いつもニコニコ笑っておられる。ルンキャンさんは肝っ玉かーさん（失礼）のような方でなんでもテキパキやってくれる。時間のある時は料理も作ってくれる。これがおいしい。

お二人共偉ぶったところが全くなく我々ゲストにも親しく接してくれます。

スラゴンの敷地は２万坪もあり、果実の木がいっぱい植わっており、ポニーも放牧されている。また敷地内には水量豊かな川が流れておりその川の上にベランダを渡しそこが食堂でもあり我々のくつろぎの場所にもなっている。

屋敷内での果物は毎食、食べきれないほど提供される。私の家内など大好きな果物の御蔭でスラゴンにきて体調がすこぶるいいと言うほどである。

スラゴンも６年前に比して随分と清潔になりました。部屋のトイレ周りとか、ベランダのハエも見かけなくなりました。食事も料理担当エマ嬢の頑張りでとっても美味しくいただけます。

たびたびシャワーが止まるのはお笑いですがいずれ改善されるでしょう。

ラナウゴルフクラブ（ラナウゴルフ＆カントリークラブ）

「１０００円でゴルフが出来る」の本に魅かれて来たゴルフ場である。とにかく安いのである。一か月４５００円の会員登録をすれば回り放題である。例えば２０回プレーしたとして実に一回当たり２２５円になる。税金、保険等その他は一切なし。カートを借りると一日１５

０円、キャデーを頼んでも９ホール４５０円である。計８２５円。１０００円でおつりがが来る勘定である。

このゴルフ場の元はラナウの近郊に銅を産出するところがあり三菱金属が合弁会社を作り銅を掘ったことによる。会社が社員の福祉施設としてこのゴルフ場を７０年代のはじめに造成したのが始まりという。銅を掘りつくし日本に引揚げるとき地主にゴルフ場を寄贈、返還したことにより今このゴルフ場が残ったということだろう。

社員の福祉施設、それならショートコースに毛の生えた位を想像しがちだが、とんでもない。ワイルドでタフである。まず、いいスコアーは望めない。距離はたっぷり、谷あり、クリークあり、ラフは長く、アップダウンありでその上グリーンは傾斜があるのと日本での１・５倍くらいの力でヒットしないとカップにとどかない。

勿論、日本のゴルフ場のように整備は行き届いていない。ワイルドなのである。相当な上級者でも手を焼くことは間違いないだろう。９ホールのゴルフ場だが９ホールで十分である。自分でカートを引いて回るわけだが日中はやはり暑い。アップダウンもあるので汗びっしょりである。初日は慣れないのでふらふらになる人もいる。

谷に、ラフにボールを無くしてしまう。ボールは日本を出るとき十分に用意する必要がある。ニューボールは勿体ない。

今回、私はラナウゴルフ場に来るにあたり三つの目標を持ってきたが結果的に一つもかなえる事が出来なかった。

一つ、２週間のうち一回は３０台で回りたい。一つ、難関８番ホールでスリーオンしたい。一つ、９番の難しいグリーンに２オンしたい、の三つである。ことごとく跳ね返された。確かに難しいとは思うが全く可能性がないとは思っていない。もう来年に向け再挑戦の意欲を掻き立てている。基本的なレベルアップが少し必要である。

練習で克服を何とか図ります。ただ年だけは年々若くなるわけにはいかないのでその事がちょっと心配。

今年初めてジャパニーズとローカル（地元）の対抗戦がＫさんの骨折りであくまでも親睦を主目的に２月２４日に行われた。惨敗である。団体戦は勿論、個人戦でも男子はＫさんが４位に入ったのみで親睦とはいえ真に情けない結果となった。女子は優勝こそ逃したが２位、３位を占めジャパニーズの面目を辛うじて保ってくれた。やはりローカルはコースに慣れている。引き換え我々はどうも勝負弱い。特にパターにもっと対策が必要だ。来年はリベンジである。

そのあと表彰式を兼ねて酒パーテイが例年通り開催され最後はカラオケまで飛び出して大いに盛り上がり、正に親睦を深めた。

ラナウの町

ラナウはキナバル山の麓の小さな高原の町である。５００メートル四方ほどの中にレストラン（食堂）、銀行、スーパーマーケット、果物市場、電気店、床屋までが集中してあり大変便利で日常の用は十分に足りる。

スラゴンから３Ｋ、ゴルフ場から１Ｋほどである。レストランは数多くマレー料理、中華、インド料理とそろっている。いずれの店も驚くほど安くお昼代がお茶を入れても３００円は掛からない。そしてそれなりにおいしい。

マレー、インドのレストランはまず酒は置いてない。イスラムの関係からと思われる。ラナウの町では極端に言えば金の使いようがない。いわゆる贅沢なものがないのである。ホテルはないし、あってもバックパッカー用の木賃宿みたいなものだし、レストランのメニューにもそんな高いものはない。我々以外の旅行者をまず見かけないし、日本人とみて金目当てに寄ってくるような者も全くいない。荒らされてなくて穏やかないい街である。

キナバル山は世界遺産の山であるが日本ではそんなに知られてないように思う。奇嶽である。スゴイ。岩の塊をそのままおっ立てたような山だ。直立している。富士山のようにすそ野を引いた山とは正反対だ。４０９５Ｍ，東南アジア一番の高さを誇る。サバ州先住民には霊の帰る山として崇められているという。

スラゴンの風につつまれて

スラゴンの一日は毎朝６時頃鶏の鬨の声で起こされて始まります。７時に朝食。朝食はスープたっぷりの麺で野菜と卵が乗っているのが多いかな。あっさり美味しいです。朝も旬の果物がたっぷりである。９時に皆でゴルフ場に出発。スラゴンの車で送ってくれる。その日その日の

組み合わせでスタート。いろんな人と回れるようＫさんが組んでくれる。お昼前には９ホールを上がってくる。

そのあと皆で街にお昼を食べに。買い物のないときは１時過ぎにはスラゴンに帰ってくる。

一番にシャワーである。汗を流し体がさっぱりして正に生き返った気分である。汗まみれの衣類を水洗いすれば後は夕食まで全く予定がない。昼寝をするか、読書をするか、パソコンをいじるか・・・・

私はこの時間が大好きなのです。序の部分がこの時です。ウヰスキーを片手にぼんやりとスラゴンの風景を楽しんでいると爽やかな優しい風が吹いてきます。木々の間を通り抜けた風は緑色に染まったような感じがして、適当な湿度でやわらかく、ゆったりとつつんでくれます。至福の時です。やがてうとうとと・・・。

その後も夕飯まで持て余すほどのたっぷりの時間です。これはもう贅沢と呼ぶほかないでしょう。日本国内では中々こういう感じは味わえません。

午後は時として猛烈なスコールが来ます。もう数十メートル先も見えなくなるような雨です。でも長くて一時間、多くは３０分ほどで上がります。風もいいですが雨も南国らしくて私は好きです。雨上がりのスラゴンの景色もまた違った趣です。

夕食は６時半から皆でベランダでいただきます。デザートで今回の滞在でもマンゴスチン、パパイヤ、ドリアン、

ランブータン、バナナ等、たくさんの果実をいただきました。

食後はソファーの方に席を移し地元の焼酎モントクにちなんでモントクバーと称し、モントクを飲みながら９時ごろまで歓談です。部屋に帰り１０時には就寝です。

これがスラゴンの一日でほぼこの繰り返しです。

先達に感謝

６年前、寒い日本の冬のゴルフは楽しくないなー。時間はたっぷりあるのだから暖かい南の国で安くゴルフが出来るところはないかなー。そして探し当てたのがこのラナウでした。

１回、2 回、3 回と回を重ねるごとにゴルフ一辺倒だった私たちもラナウの自然、そしてラナウの人々をも好きになっていました。長閑でゆったりとした田園風景は心を癒すような気がしますし、ニコニコし世知辛さの全くない地元の人にも好感を覚えます。

このように我々がラナウライフを楽しめるのもやはり先輩方の御蔭によるところ大でしょう。

小林さん（お許しいただいて実名で）、文中でもＫさんとして登場してますが。小林征二、桃代ご夫妻には本当に感謝しております。ご夫妻は 12，3 年前から最良の地を求めて旅し、ここラナウに辿りついたと聞いております。その後は避寒と避暑で年 2 回づつ訪問しているとの事。その 10 年余の間にオスマン、ルンキャンご夫妻はもとより、ゴルフ場関係者，レストランの店主、市場のおばさん、そして我々が毎日お世話になるタクシードライバー達と広く人間関係を作られました。これは財産です。

今回、敬服したことがございます。オスマン夫妻の次男デール君の結婚式です。オスマン夫妻も気を使ったでしょうが小林夫妻に招待状を送りました。小林さん夫妻は通常のラナウ訪問を

一か月近く早めて 12 月末のデール君の結婚式に出席しました。もう親戚なんですね。感動です。デール君は幸せ者です。

小林夫妻がいるだけで安心です。出来るだけ小林さんを煩わせないようにとは心掛けてはいますが何かの時小林さんが居られると思うだけで安心します。

また小林さんはホームページで「ラナウのご紹介」掲載しております。私は日本に居て何か新しい情報は、紀行文は載ってないかといつも楽しみにしています。メンテナンスも大変だろうと想像します。この「ラナウのご紹介」は世界各地の人が見ています。ラナウの町、いやサバ州にとっても大変な貢献です。完成度の高いものです。いずれ出版という話になることを期待しています。

小林さんは「俺は好きでやってんだよ」とおっしゃるかもしれません。しかし我々がラナウライフを楽しめるのは小林さんの御蔭であることは間違いありません。

健康に留意され桃代夫人共々いつまでもラナウにお出かけくださいますよう祈念いたしまして拙文を閉じます。